

# 悠久の河

3

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

### 意宇川

意宇川は天狗山に源を発し、その流れはくねくねと四里（十六キロ）にも及び、川幅は三十間余り（約五十四メートル）に達するところも有った。

日頃は水量も少なく、穏やかで村の人々に恵みを与えるこの川も、雨期に入り、ひとたび豪雨に襲われると、流れは濁流となり、村の田畑は流失し、家屋は損壊、流失し、人の命さえも失われ、村は壊滅状態になることも、一度や二度ではなかった。

日吉村の民、百姓は、度重なる災害に、失意の日々を送っていた。

こんなとき、暴れ川、意宇川の流れを変えようと思いついたのが、村の庄屋だった彌兵衛の祖父の家正だった。

岩山を切り開き、川の流れを短くして水の通りの良い新川を作り、古い川には堤防を築き、水害から村を守ろうとする試みを思いついたのである。

川の流れを変えて、村を水害から守りたいという家正の願いは、早速、家正と親しい松江藩士の水野孫四郎、早見与一兵衛の紹介で、松江藩の重臣会議にかけられることになった。

「いかがでござろうか。度重なる水の害にて日吉村の民、百姓は、年貢どころか、日々の食物にさえ事欠く始末、放ってはおけませんまい。庄屋の家正の川違えの考えも、なかなかの名案と思われまするが…」



画 高田勲

「さようでござるな。家正の願いは誠にもっともでござるが、わが藩の財政も豊かとは言いがたい。わずか、百四、五十石にすぎない小村に對して、このように急々な工事を起こすというのも、いかがなものやら」

重臣の中には藩の財政を思い反対する者も多く、家正の願いは叶えられぬかに見えた。

しかし、この話は重臣を通じて藩主の知るところとなった。

当時の松江藩主、松平直政は、藩の歴史に名こそ藩を預かる者の役目。日吉村は、なるほど小さな村であるが、大きな村も、小さな村も、村の一大事に変わりはあるまい。村が小さいからという理由で、藩が手を貸さぬということが有ってはなるまい。日吉村の家正の願い、なかなか勝れたものではないか。ぜひ叶えてやれ」と、申し渡したのである。

慶安三年（一六五〇年）家正の願いである意宇川の川の流れを変える工事が松江藩の事業として始まった。

川の工事は二年目に入り、季節は夏を迎えようとしていた。

この地方では珍しく雨が少ないという天候も味方して、工事は予想以上の進み具合であった。川原は活気に溢れ、多くの人夫が立ち働き、石工が岩を削る音が高らかに響いた。